

## 「いばら姫」における魔法の眠りと時間の喪失

### —グリム兄弟の文献学的観点から—

大野 寿子

はじめに

グリム兄弟が蒐集刊行した『子どもと家庭のためのメルヒェン集』(*Kinder- und Hausmärchen*, 以下 KHM と略記する)<sup>1</sup> 第五十番「いばら姫」(*Dornröschen*) は、ペローの「眠れる森の美女」(*La belle au bois dormant*) やバジール・レの「太陽と月とターリア」(*Sole, Luna e Talia*) と同様、ATU410「眠れる美女」型に属するメルヒェンである。<sup>2</sup> この話の展開において、主人公の永きに渡る「魔法の眠り」は、「一時的な死」とも見なしうる重要なモチーフの一つである。「いばら姫」における「不思議な眠り」が、通常の時間概念からの逸脱という意味で、グリム兄弟『ドイツ伝説集』(*Deutsche Sagen*, 以下 DS と略記する) に表れる「時間の喪失」のモチーフと密接に関わることを、ハインツ・レレケは指摘する。<sup>3</sup> すなわち、通常の生活空間から隔離されていた主人公が数日後に帰郷すると、数百年の月日が経過していたという話と、不即不離の関係にあるというのである。ところで、「眠れる美女」型メルヒェンの「魔法の眠り」には、植物による日常世界からの遮断が不可欠である。その空間は、グリム版においては「茨の生垣」、ペロー版やバジール

版では「森」として描かれており、鬱蒼とした植生空間の無気味さと異質性が暗示される。しかしながら、KHM においてはなぜ「茨の生垣」なのか。<sup>4</sup>

グリム・メルヒェンのフランス起源説および諸話改変の事実がレレケによって指摘され<sup>5</sup>、「なによりも忠実と真実性を重視した」<sup>6</sup>というヴィルヘルム・グリムの言説の信憑性が疑われて久しい。KHM は、「ドイツ」の民衆のメルヒェンではないのではないかという疑念が、二十世紀後半のグリム研究者の間に生まれたのである。しかしながら、現代国家を連想させるドイツやフランスではなく、十九世紀に生きたグリム兄弟にとつての「ドイツ」という概念、すなわち「ドイツ的なもの」*Das Deutsche* がいかなるものであったのかを見極め、彼らの言説を、彼らの立場に立って理解しなければ、グリム・メルヒェンの真の価値は見えてこない。筆者は、グリム兄弟が論文書簡等様々な場面で使用した自然、とりわけ植物や水の象徴表現から、歴史的適応性と普遍性を内包した、彼らなりの「ドイツ的なもの」の可能性を導き出し、その概念が、とりわけ KHM においては「森」*Wald* という語に凝縮されているという結論に至った。<sup>7</sup> しかしながら、KHM 改変の過程において、「森」が加筆された例、「森」の内部が豊かになった例が存在するにもかかわらず<sup>8</sup>、また、先行するペロー「眠れる森の美女」では「森」が、「魔法の眠り」を保護する重要な空間であるにもかかわらず、「いばら姫」では「森」ではなく「茨の生垣」(*Dornenhecke*)が描かれており、エーレンベルク稿より一度も書き換えられてはいない。グリム・メルヒェンにおける「森」の存在を紐解くことは、同時に、「いばら姫」における「森」*Wald* の不在を考えなければならない。本論考の目的は、「魔法の眠り」、「時間の喪失」と「一時的な死」との関わり、そして、植生による閉鎖的空間の意義を、ヤーコプ・グリムの『ドイツ神話学』(*Deutsche Mythologie*, 以下 DM と略記する) を手がかりに考察することにある。さらに本論考は、KHM 決定版の文言にのみ終始し、改変の

<sup>4</sup> 「いばら姫」*Dornröschen* という語に含まれる、「バラ」*Rose* を伴った単語 *Dornrose* と *Dorn* とを区別するため、前者を「いばら」、後者を「茨」と訳す。

<sup>5</sup> Heinz Rölleke: Die 'stockhessischen' Märchen der 'alten Marie'. Das Ende eines Mythos um die frühesten KHM-Aufzeichnungen der Brüder Grimm. In: *Germanisch-Romanische Monatsschrift*. NF 25. Jg. 1. (1975), S. 74-86.

<sup>6</sup> Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Bd. 1. (Göttingen 1857.) nachgedruckt u. hrsg. v. Heinz Rölleke. Stuttgart 1991, S. 21 (Vorrede von der 2. Aufl.).

<sup>7</sup> 大野寿子「グリム兄弟における理念としての〈森〉」、九州大学独文学会「九州ドイツ文学」16 (2002)、63-86 頁参照のこと。Vgl. Hisako Ono: Kultursemantik und Naturmetaphorik — Die Brüder Grimm über das *Nibelungische* —. In: Goethe-Gesellschaft in Japan (Hrsg.): *Goethe-Jahrbuch*. 48 Jg. (2006), München (Iudicium Verlag), S. 139-156.

<sup>8</sup> 森が加筆された話には、KHM5「オオカミと七匹の子ヤギ」、KHM29「三本の毛をもつ悪魔」、KHM「フィッチャー鳥」等があり、森の描写が豊かになった話としては、KHM1「カエルの王様、あるいは鉄のハインリヒ」、KHM53「白雪姫」等がある。大野寿子：前掲書 (2002 年)、65-68 頁参照のこと。

<sup>1</sup> 第一版は 1812 年 (第一巻) と 1815 年 (第二巻) に刊行される。その後、1819 年に第二版、1837 年に第三版、1840 年に第四版、1843 年に第五版、1850 年に第六版、1857 年に第七版 (グリム兄弟生前の最終決定版) が刊行される。

<sup>2</sup> ATU とは、アンティ・アールネとステイス・トンプソンの話型分類 AT (Antti Aarne u. Stith Thompson: *The Types of the Folktale* (FFC. 184). Helsinki 1964.) の、ハンス=ヨエルク・ウーターによる改訂版の略称である。Vgl. Antti Aarne, Stith Thompson, Hans-Jörg Uther: *The Types of international Folktales* (FFC. 284-286). Bd. 1. Helsinki 1964, S. 244f.

<sup>3</sup> Heinz Rölleke: Die Stellung des *Dornröschen*-Märchens (KHM50) — zum Mythos und zur Heldensage. In: *Die Märchen der Brüder Grimm. und Quellen und Studien*. Trier 2000, S. 158.

事実やグリム兄弟の思念を軽視する傾向にある日本のグリム童話研究に、文献学的見地から、さらなる解釈の可能性を提示する。

## 1. 運命の告知と賢女

「眠れる美女」型メルヒェンの女主人公は、グリム版とペロー版においては「鍾」Spindelに刺され、バジール版では亜麻の繊維が彼女の爪の間に入り込み、「死」の代わりに与えられた「眠り」に落ちる。「死」の予言も、「眠り」という代替処置も、KHM 第七版では、十三人の「賢女」Weise Frauenによって与えられている。ところがエーレンベルク稿と第一版においては、「賢女」ではなく十三人の「妖精」Feenが、いばら姫の運命を司る。この箇所は、七人の「妖精」に主人公の運命が左右されるペロー版や、それが三人の「妖精」であるバジール版に、より近い印象を与えうる。ところでヤーコブ・グリムは、「いばら姫」における「賢女」と「鍾」と「運命」との関わりを、北欧・ゲルマン神話における運命の三女神ノルンが紡ぐ運命の糸に遡及させ、ドイツ・北欧・スコットランド間の運命の女神神話の連関性と共に示唆する。<sup>9</sup> 運命の三女神ノルンとは、ウルド(Urd) 、ヴェルダンディ(Verdandi)、スクルド(Skuld)という名を持ち、それぞれが古ノルド語で「為ったもの」gewordne、「為りつつあるもの」werdende、「いずれ為るべきもの」werdensollende、すなわち「過去、現在、未来」を意味するという。彼女らは、ローマ神話のパルカやギリシャ神話のモイラと同様、運命の女神であると同時に出産の女神でもある。<sup>10</sup> ところで、運命を司るとは、糸を紡ぐ行為、あるいは機を織る行為に象徴される。このようなノルンの属性が、「妖精」Feeの糸紡ぎ同様、「家庭的かつ母性的な神性」の存在を暗示するとヤーコブ・グリムは考える。<sup>11</sup> さらにノルンは、泉や井戸の側に出現するので、ホルダやベルタ同様、糸紡ぎに熱心な女性、赤子や子どもに祝福を与えるという。<sup>12</sup> ここで、祝福というものが幸せな人生や長寿を指し、その反対のものが不幸や短命を指すことが容易に推察される。「賢女」によって「死」(＝短命)とそれに代わる「眠り」を予言された「いばら姫」は、両親に「鍾」を隠され、熱心に糸紡ぎできない立場にあった。結果的にではあるがこの状況は彼女が、

ノルンたちからの「祝福」を受ける資格を喪失していることを、象徴的に物語っているのではないか。

『ドイツ神話学』でヤーコブ・グリムは、『ノルナゲスタ・サガ』の「いばら姫」に似た箇所を要約している。子どもが生まれると人々は、運命を告げるスパコヌール(ノルン)を家に招いてもてなす慣わしであるが、ある日、ノルナゲスタの父親の元へ彼女たちがやってくる。赤子の眠る揺り籠の上には、二本のろうそくが燃えている。最初にやってきた二人のノルンが、「子孫までの繁栄」と「幸福」をその子に授ける。三番目(あるいは最年少)のノルンが、側で燃えているろうそくより短い人生を授ける。すると一番目のノルンが母親に、ろうそくを隠して灯さぬよう指示をするというのである。<sup>13</sup> ろうそくに象徴された寿命、すなわち生きる時間の喪失と獲得に、運命の女神ノルンが深く関わっている例の一つである。

さらにヤーコブ・グリムは、norn(ノルン)という単語が、dorn(茨)、korn(穀物)、horn(角)等と同じ響きを持つことを強調する。<sup>14</sup> このような見解を有するヤーコブが、「いばら姫」テキストの中に、響きの類縁性に端を発する、言葉遊びのような仕掛けを見いだしていたとは、全く考えられないだろうか。nornと思しき賢女に運命を予言され、響きの上でnornを想起させるdornに守られながら、「死」に似た「魔法の眠り」につく主人公が、dornを含むDornröschen(「いばら姫」あるいは「野ばらの君」)<sup>15</sup> という名を獲得するという響きの連関である。このような連関を見いだしていたことは、ヤーコブに限っていえば、全く考えられない話ではないのではないかと。<sup>16</sup>

ところで、パルカと称された運命の女神が民衆の想像世界から消え去ると、特にロマンス語系文化圏は、中性名詞から新しい個体名称を作り上げたという。すなわち、ラテン語の fatum(神託、予言、運命の女神)から、イタリア語の fata、スペイン語の hada、プロヴァンス語の fada、フランス語の fée

<sup>13</sup> ebd., S. 338f.

<sup>14</sup> ebd., S. 335. 散文ではなく韻文(とりわけ叙事詩)に「ドイツ的なもの」、「いにしえのもの」das Altertümliche かつ「詩的なもの」das Poetische を見出す見解に、兄弟間の相違はない。

<sup>15</sup> 「いばら姫」Dornröschen というタイトルはエーレンベルク稿から存在する。しかしながらテキスト中で、茨に囲まれ眠る美女がDornröschenと命名されるのは、第一版からである。「いばら姫」はマリー・ハッセンプフルークから聴いたものとされるが、話はともかくタイトルをも、彼女から聴取したという保証はない。このタイトルが、グリム兄弟による命名である可能性が残る。

<sup>16</sup> 確かにKHMの改変作業のほとんどは、ヴィルヘルム・グリムが行っていた。兄弟が常に同意見とは限らない。実際に意見の食い違いは存在している。しかしながら兄弟での業績に関しては、グリム「兄弟」の見解として見なさざるを得ない部分もある。

<sup>9</sup> イングランドやスコットランドの口頭伝承が、運命の女神の名を保持し続けたとヤーコブ・グリムは考える。彼はさらに、シェイクスピア『マクベス』に登場する weidsisters を例にあげ、彼女らをノルンと同じ系譜と見なす。Vgl. Jacob Grimm: *Deutsche Mythologie*. Bd.1. (Göttingen 1835.) Nachgedr. Wiesbaden 1992, S. 337. (以下、DMと略記する。)

<sup>10</sup> DM. Bd. 1., S. 335.

<sup>11</sup> ebd., S. 345. (女神の存在を認めることが、男性原理中心のキリスト教文化以前の古代ゲルマンの特性の一つだとヤーコブは考えている。)

<sup>12</sup> ebd.

が成立したというのである。<sup>17</sup> ヤーコブ・グリムはこの *fée* が、「ケルト信仰の名残のある女性的存在」なのか、「ゲルマン（北欧）のノルン」の影響下で成立したのかの明言は避ける。ただ、この *fée* が、もともとは「運命の告知」をも意味する語 *fatum* から成立したにもかかわらず、時代が流れ、とりわけフランス語圏において、「女性の精霊」すなわち「妖精」へと意味範囲が変化したとの指摘は興味深い。<sup>18</sup> というのも「いばら姫」では、エーレンベルク稿と第一版において、運命を予言する存在は *Fee* と記されていた。この箇所をヴィルヘルム・グリムが第二版から、*Weise Frau* へと書き換えている。グリム兄弟は「賢女」なるものの源流に、北欧・ゲルマン神話のノルンを見ていたことは上述の通りである。従ってこの改変が、フランス系妖精物語のドイツ化ととられても仕方ない。しかしながら、彼らは *Fee* という語に、「運命を予言する女性」から「妖精」への変容を明らかに見てとっている。このような形態学的見地を有するグリム兄弟が、精霊に成り下がってしまった *Fee* の代わりに、その原意たる「予言」*Weissagung* をなす女性、すなわち「賢女」*Weise Frau* という語を当てはめたのだとしたら、この書き換えを、フランス色を拭い去る行為としてのみ解釈すべきではない。

## 2. 魔法の眠りとブリュンヒルト

グリム兄弟は、『子どもと家庭のためのメルヒェン集』第三巻注釈書の「いばら姫」の箇所で、次のように述べる。

茨の防壁に囲まれた城の中で、真の王子——茨が彼に道を開ける——から救われるまで眠る乙女は、ジークルトのみ通り抜けることができる茨の防壁に囲まれて眠る、古代北欧伝説のあの〈ブリュンヒルト〉なのである。乙女を刺し眠らせるあの錘は、オーディンがブリュンヒルトを刺した〈眠りの茨〉である。<sup>19</sup>

「いばら姫」の「魔法の眠り」と、『エッダ』におけるブリュンヒルトの「眠り」の場面との類似性がこのように、他でもないグリム兄弟によりすでに指摘されているのである。メルヒェンや伝説が、神話という源泉から流れ出たと見なされる<sup>20</sup>論拠として、いばら姫のブリュンヒルトとの連関が、重要な位置を占めていたと思われる。また、1846年にドイツ語に翻訳刊行された、

『ジャンバティスタ・パジエーレの「ペンタメローネ、あるいはあらゆるメルヒェンの中のメルヒェン」』に付されたヤーコブ・グリムの序文にも、以下のような箇所がある。

我々はドイツの話 [=『いばら姫』] を基本におこうと思う。というのも、いばら (*Dornrose*) ——眠れるバラ (*Schlafrose*)、眠りクンツ (*Schlafkuntz*) ——という名が、眠りの茨 (*Schlafdorn*) をすぐに連想させるからである。その眠りの茨でオーディンは、ヴァルキューレであるブリュンヒルトを刺して眠らせた [中略]。彼女は鎧と兜に身を包み、炎に囲まれ、誰も寄せ付けないヒンダル・フィアルという広間に眠るのである。<sup>21</sup>

「魔法の眠り」をめぐる諸モチーフの、北欧・ゲルマン神話からの影響を指摘するグリム兄弟ではあるが、「いばら姫」が生粋のドイツ民話であると考えているわけでもない。というのも、エーレンベルク稿の「いばら姫」の末尾には、「これはペローの眠れる森の美女から完全に由来する（または移された）ように思われる」という、ヤーコブ・グリムの書き込みがあるからである。<sup>22</sup> このような書き込みは、グリム兄弟がまさにペローのメルヒェンも熟知していたからこそなされるのであり、「いばら姫」の話自体をドイツ生粋のものといっているのでは決してない。そうではなく、特にこの「眠り」のモチーフにおいて、北欧神話との深い繋がりを強調しようとしているだけなのである。<sup>23</sup>

ところでヤーコブ・グリムは、『ドイツ神話学』の別所でも、「オーディン

<sup>21</sup> J. Grimm: *Der Pentamerone oder Das Märchen Aller Märchen* von Giambattista Basile. Aus dem Neapolitanischen Übertragen von Felix Liebrecht. Nebst einer Vorrede von Jacob Grimm. In: *Jacob Grimm. Kleinere Schriften*. Bd. 8. (Berlin 1864.) Nachgedruckt Hildesheim 1965, S. 195. (以下 JGKS と略記する。) ヤーコブ・グリムは、ロマンス語圏の妖精物語を、*Feesagen* と呼び、*Feemärchen* とは呼ばない。これは、妖精物語に、時代や地域を感じさせる要素が多く盛り込まれているため、時間的・地理的拘束のない Märchen の定義にそぐわないからであると推察される。これに対しヴィルヘルムは *Feemärchen* を使う。

<sup>22</sup> Heinz Rölleke (Hrsg.): *Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm. Synopse der handschriftlichen Urfassung von 1810 und der Erstdrucke von 1812*. Genève 1975, S. 108.

<sup>23</sup> 「いばら姫」において受胎告知をする動物が、エーレンベルク稿、第一版、第二版では「ザリガニ」だが、第三版では「カエル」へと書き換えられている。「ザリガニ」はペロー「眠れる森の美女」には登場しないが、ドルノア夫人の『新しいメルヒェン集、すなわち流行の妖精たち』(1698年)に収録されている「森の雌鹿」に登場している。「いばら姫」は、グリム兄弟が、この「森の雌鹿」に由来する話とは知らず KHM に収録したと見なされがちであるが、ペローについてもドルノワ夫人についても、KHM 序文で触れられている。つまり、受胎告知の場面に関する「森の雌鹿」からの受容の可能性を、彼らは知っていたことになる。Wilhelm Grimm: Vorrede von KHM 1. Aufl. In: *Wilhelm Grimm. Kleinere Schriften*. 1, S. 326. (以下 WGKS と略記する。)

<sup>17</sup> DM. Bd. 1, S. 340. (ヤーコブはドイツ語名詞を小文字で始める。)

<sup>18</sup> ebd.

<sup>19</sup> Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Bd. 3. (<sup>1</sup>1822. Göttingen.) <sup>3</sup>1822. Nachgedr. u. hrsg. v. Heinz Rölleke. Stuttgart 1994, S. 97.

<sup>20</sup> DM. Bd. 1., S. XII. (Vorrede).

が〈眠りの茨〉Schlafdorn で、ヴァルキューレの一人を服の上から刺す」行為と、「いばら姫が錘で指を刺し、死の眠りへと落ちていく」様子との類縁性を協調している。<sup>24</sup> ここで、いばら姫の百年の眠りが、死にも等しいということが見てとれる。またヤーコブは、「青銅器時代より、墓にはサンザシ(hagedorn)が植えられ神聖視されていた」<sup>25</sup>とも述べている。「死」と「眠り」と、植物の幹からの伸びた突起物である「茨」との深い関わりを、いにしえの慣習より証明しようとしているように思われる。

二十世紀初頭の民俗学者ロベルト・ペッチュは、自らの論文の中で、死の眠りに落ちるための三つの方法について語っている。すなわち、「締める、刺す、毒」の三つの方法、あるいはこの三つの段階を経て、主人公が「死の眠り」へと誘われるというのである。<sup>26</sup> その中の一つである「刺す」行為は、「いばら姫」に受け継がれており、「締める」と「刺す」という二つが、「鎧で締め付けられ、眠りの茨で刺される」ブリュンヒルトに表われているという。しかしながら、三つの方法がそろっているわけではなく、双方とも不完全な形式といえる。この「死の眠り」へと誘う三つの方法を色濃く残しているのが、「組み紐に締められ、櫛が刺さり、毒のリンゴを食べて」死に至る、「白雪姫」だと見なされる。このような、メルヒェンにおける英雄伝説や神話の受容については、すでに多くの研究が存在しているのである。ところがボルテ/ポリーフカは、『グリム兄弟の子どもと家庭のメルヒェン集』についての注釈書』の中で、「眠れる美女」型メルヒェンの、「いばら姫」よりも古いロマンス語圏およびゲルマン民族間での流布の少なさから、グリムの「いばら姫」を、古代ゲルマンの英雄伝説等から推論することを躊躇する。<sup>27</sup> この点で、「いばら姫」と「ブリュンヒルト」を結び付けようとする意見との相違であり、だからこそ浮かび上がるのはむしろ、双方を積極的に結び付けようとしていたグリム兄弟の意志の存在であろう。

### 3. 「魔法の眠り」と「時間の喪失」、そして「茨」との関わり

「魔法の眠り」や「時間の喪失」は、KHM のみならず、グリムの『ドイツ伝説集』(DS)にもよく登場する。代表的な話を二つ挙げる。

<sup>24</sup> „Dornröschen stach sich den finger an der spindel und fiel in todenschlaf, (...)“ 錘が「指」を刺したということが、『ドイツ神話学』には明示されている。Vgl. ebd. Bd.1, S. 347.

<sup>25</sup> DM. Bd. 2., S.1007.

<sup>26</sup> Robert Petsch: Dornröschen und Brynhild. In: *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur*. 42(1917), S.92f.

<sup>27</sup> Johannes Bolte u. Georg Polívka: *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*. Bd. 1 (Jacob Grimm und Wilhelm Grimm Werke. Forschungsausgabe. Bd. 2) (Nachdr. v. Ausgabe 1913-32.) Hildesheim/ Zürich/ New York 1992-94, S. 434.

DS151「ハイリングの小人」: タシュヴィッツの一人の女性が聖ペテロと聖パウロの日に森へ入り、そのまま日が暮れてしまう。岩の側の家に住む小人のハイリング老人に一晚の宿を乞い聞き入れられる。ところが翌朝、彼女が目覚めると、家が消えている。彼女が自分の村へ戻ると、村の様子が様変わりしている。教会記録簿には、百年前に、彼女と同名の者が、森に入り行方不明になったことが記されていた。<sup>28</sup>

DS428「眠れる王」: フランク王グントラムが木陰で昼寝をしていると、彼の口から小さな動物が這い出し、川を超え、山の穴の中へ入っていく。その動物が数時間後に再び王の口の中へ戻ると、王が目覚め。彼は、その動物が体験したことを夢に見たという。それは、山の穴の中で財宝を見つけた夢であり、実際にその山で財宝を発見することになる。<sup>29</sup>

DS151「ハイリングの小人」において、時間の流れの違う異質な空間が「森」であり、そこに小人の存在が不可欠であった。この女性にとって、森の家での一晚の眠りが、通常での百年の眠りに相当すること、そしてその百年の間、彼女はまったく年をとらなかつたことは、「いばら姫」に通ずるものがある。すなわち、「森」の中の一晚の「眠り」が、百年の「眠り」と見なされるのである。通常時間を生きる立場から見るとこの女性は、本来ならばありえない百年を獲得したことになる。しかしながら女性の立場からいえば、過ぎ去った百年は身に憶えのない時間であり、自分の本来の居場所や共に生きる家族を失い、共に生き享受すべき時間を喪失したことにもなる。このような現象が、閉鎖された自然の懷で起こるところが、「いばら姫」の「茨の生垣」や「眠れる森の美女」の「森」の機能に通じる点である。「ハイリングの小人」の主人公は、「森」の中に入り死んだと見なされていた。小人という異世界の生き物との接触が可能となる「森」は、異界にして死界、すなわち彼岸と見なされる。主人公の逗留した「森」が、このように死者の世界であるならば、彼女がいわば、死の時間を生きたという解釈も、成り立つのではないだろうか。

DS428「眠れる王」では、睡眠中の王の口から動物が飛び出すという、無気味な描写が際立つ。ヤーコブ・グリムは『ドイツ神話学』の「魂」の章で、魂が睡眠中に肉体から遊離する現象を指摘する。<sup>30</sup> 魂が、動物の姿や鳥の姿

<sup>28</sup> Brüder Grimm (hrsg. v. Heinz Rölleke): *Grimms Deutsche Sagen*. (Nachdruck der 1. Aufl. 1816-18) Frankfurt 1994, S. 202.

<sup>29</sup> ebd., S. 472.

<sup>30</sup> DM. Bd. 2., S. 689ff.

となって口から飛び出し動き回るといのである。その魂が再び口から肉体へと入ると、当人は、魂が外で経験したことを夢で見ている。魂の化身である動物や鳥が戻ってこないことは、そのまま死を意味する。つまり睡眠状態は、魂が肉体から遊離している状態、すなわち死とも考えられるのである。このような定義に従えば、鍾に刺された「いばら姫」の睡眠状態のみならず、毒のリンゴを食した「白雪姫」の仮死状態もまた、魂の肉体からの乖離状態と見てとれるのではないか。眠る、あるいは死んで横たわる二人の美女は、魂なき肉体そのものなのである。<sup>31</sup>

ところで、いばら姫が眠りに落ちるやいなや、茨の生垣が年追うごとに成長し、眠れる城を覆い隠す程となる。この点は、ペロー「眠れる森の美女」の「森」も同様である。日常空間と非日常である城とを遮断している意味において「茨」は、日常空間と異空間、この世とあの世との境に生育している「森」と同じ機能を果たしているといえる。この「茨の生垣」を越えると、あるいは「森」の奥深くに分け入ると、「死」の世界が広がるのである。<sup>32</sup> さらにレレケの指摘に従えば、このような空間は、DSの「死者がさまよう森」<sup>33</sup>とも重なるところがあるという。しかしながら、「いばら姫」や「眠りの森の美女」で登場する「茨の生垣」には、遮断の機能は存在しても、進めば進むほど異質になるという「森」の無気味な奥深さは感じられない。奥深さの感じられない植生ならば、本来、外界との隔絶は難しく、従って、茨の棘という、そこを越えるために要する「苦難」を象徴的に表現し、「越境」の過酷さを指し示しうる形状の植物が必要だったのかもしれない。<sup>34</sup>

『ヴェルスンガ・サガ』で、楯の垣根に守られて眠れるブリュンヒルトが、『エッダ』では、炎の壁に守られて死の眠りにつく。ヴァルキューレの火焰といえ、剣の象徴表現であることも知られている。また、人間を槍（を持つ戦士）の木で表現する場合もある。槍、炎、剣、樹木といった「生垣」や

「森」は、「死の眠り」を保護する役割を担い、その内部が「死」の領域であることは上述の通りである。ところがペロー版とバジール版において「森」の内部は、同時に「出産」の場でもある。「死」と「再生」あるいは「出産」の場として、俗の領域から隔離された聖域としての機能を有するこれらの「森」はまさに、「死」と「再生」のプロセスたる通過儀礼を象徴しうる。ところが、グリム版「いばら姫」には、「眠れる美女」型メルヒェン群の第二部の幕開けとも見なしうる、「出産」の場面が欠落している。主人公は、自ら蘇生し目覚めはするものの、次の命を生み出すことはない。「森」と「茨の生垣」の機能の違いを強いてあげるとすれば、この出産の場たりえたか否かもあがるであろう。<sup>35</sup>

#### 4. 「いばら姫」あるいは「刺されて腫れ上がった子」

出産には、当然のことながら性的交渉というプロセスを伴うものであるが、グリム版にはそれもまた最初から存在しない。ところがこの件に関しては、少なくとも第一版のテキスト上で命名された「いばら姫」Dornröschen、すなわち「野ばらの君」という名に、含意があるように思われる。Dornröschenとは、「生い茂る棘をもつバラ」、「いばら」に縮小語尾を伴った造語である。しかしながらこの名は、「野ばらの君」のみならず、原語 Dornrose のもう一つの意味である、「虫によって茨の表面にできる、Rose によく似た形の異常生育（奇形）」<sup>36</sup>、すなわち「虫癭」をも示しうる。このときの Rose は、「バラ」だけでなく、「バラ色」をした「創傷丹毒」、すなわち「傷」や「腫れ」をも含意する。ここで Dornröschen が、「刺されて腫れ上がった子」をも暗示するという可能性が浮上するのである。『ドイツ神話学』の「薬草と石」の章においてヤーコプ・グリムは、「いばら姫」が「鍾」に刺されて眠るように、ブリュンヒルトが、オーディンの「眠りの茨」svenþorn, schlafdorn に刺されて眠ることを再度指摘し、この dornrose が意味在り気だと指摘する。という

<sup>31</sup> 口から飛び出した魂が、この世ならざる不可思議な空間、すなわち異界へと赴き、再び肉体へと戻るための試練を体験することもある。このような一連のプロセスは、通過儀礼の形式とも重なりえるのではないか。通過儀礼に関しては、拙論「『グリム・メルヘン』と通過儀礼—森に表れる死と再生の図式—」、九州大学独文学会「九州ドイツ文学」10（1996）、38-61 頁参照のこと。

<sup>32</sup> バジールの「太陽と月とターリア」では、「森の城」が最初から舞台となっている。

<sup>33</sup> DS308「永遠の狩人」(Der ewige Jäger)、DS309「ハンス・ヤーゲントイフェル」(Hans Jagenteufel)など。

<sup>34</sup> KHM12「ラプンツェル」には、塔の中のラプンツェルと関係をもった王子の目を傷つける Dorn（第六版より加筆）が、KHM53「白雪姫」においては、白雪姫が「森」をさまようときの苦難を強調する Dorn（第一版より加筆）が登場する。大野寿子、前掲書（2002 年）68-69 頁参照のこと。

<sup>35</sup> シェルフは、「茨の生垣に囲まれ眠る少女」に、「オーディンの眠りの茨によって魔法の眠りに落ち、炎の壁によって守られたブリュンヒルトの姿」を重ね合わせたヴィルヘルム・グリムが、人食いの姑や本妻による迫害をテーマとする、バジール版、ペロー版における第二部を意図的に切り離し、それを 1812 年第一版では KHM84「お姑さん」として収録したと指摘する。これに対し岡本英明は、グリム兄弟が「いばら姫」と「お姑さん」を採取した時期が三年ずれていることに着目し、出所は両方ともハッセンプフルーク家ではあるが、「眠れる森の美女」の後半部分の切り離しは、採取したときからのものであり、グリム自身が行ったものではないと結論付けている。岡本英明「グリムのメルヘン〈いばら姫〉(KHM50)の解釈について」、九州大学大学院教育学部紀要」3（2000）、111 頁参照のこと。

<sup>36</sup> Jacob u. Wilhelm Grimm (Hrsg.): Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm. Bd.2.(Leipzig 1854-1971.) Nachgedr. München 1999, S. 1299.

のも *dornrose* が、「野生のバラの灌木にできる、まるで苔のような瘤」であると同時に、「サンザシ(*hagedorn*)の場合、今日なお「眠りのリンゴ」*schlafapfel*あるいは「眠れるクンツ」*schlafkuntz* と呼ばれる」ものとの類縁性を有するからである。<sup>37</sup> すなわち、メルヒェンにおける *Dornrose* という名には、上述の「眠りのリンゴ」や「眠れるクンツ」にまつわる神話との関連が、不可欠だというのである。「眠りのリンゴ」*schlafapfel* とは、ヤーコブによれば、「ミツバチの一刺しにより茨に生じる」ものであり、このミツバチの一刺しによってオークの木に生じる「神託の虫癭」*der weissagende gallapfel*(=*Galle*)と、類縁関係にあるという。<sup>38</sup> マリー・ハッセンプフルークから、ペローの「眠れる森の美女」によく似た話を聴取したヤーコブ・グリムが、「いばら姫」*Dornröschen* という名称に、「野バラの君」のみならず、「一刺しによってできた瘤」のごときものを連想していたことはおそらく間違いない。では、その「瘤」は何を意味するのか。

実は、KHM「いばら姫」において「錘に刺された」という描写は、エーレンベルク稿から変わらず存在するが、それが「指」であったと明記されるのは、第六版においてようやくのことである。<sup>39</sup> 彼女は、錘を手にとったのであるから、手あるいは指を刺されたと見なすのが普通であろう。しかしながら、その明確な「指」という描写が第五版まで存在しなかった。このことはまさに、錘による一刺しあるいはそれによる傷が、場合によっては指ではなく、性的なものを想起させる箇所であった可能性を示唆しうる。それは、*Dornrose* が「虫癭」を含意することからも、容易に推察しうる。すなわち、「虫癭」の原因たる虫の「一刺し」が性交渉を、結果的な形状である木の幹の「腫れ」が妊娠を暗示しうるのである。グリム兄弟が KHM の改変過程において、性的なものを暗示する箇所をことごとくオブラートに包んでいったこと、あるいは削除したことはよく知られている。この行為が教育的配慮であったのか、時代の風潮であったのか、それを自ら望んだのか、それともやむにやまれず削除したのかの検討は、兄弟間の意見相違の可能性も含め、別の機会に譲ることとする。しかしながら KHM「いばら姫」では、女同士のいざこざを語る（ペローやバジール版には存在する）後半部分が存在しなくても、また、性的交渉と妊娠とを暗示する、指以外の刺し傷の可能性が消し

去られても、そのエロティックな原風景が、主人公が頂戴した名前に、知る人には透けて見えるという仕掛けとなっている。外来のものを重んじる当時の教養主義に批判的であったグリム兄弟（特に自国語軽視に警鐘を鳴らす兄ヤーコブ）が、ドイツ語の広がりや深みを知る者こそが、ドイツにおける真の知識人だと言わなければならない仕掛けである。多少言葉が過ぎたかもしれないが、このように KHM のテキストに、時流に対する彼らの巧みなレジスタンスが織り込まれている可能性もまた、否めないであろう。

## おわりに

運命の三女神「ノルン」*Norn* を連想させる「茨」*Dorn* の生垣に守られ、外界から遮断された空間で、「眠りの茨」*Schlafdorn* に比すべき「錘」に刺されて「死の眠り」につく姫君の名前「いばら姫」*Dornröschen* は、「刺されて腫れ上がった子」をも暗示しうるのだ。グリム兄弟が、ペローの「眠れる森」*le boir dormant* と「茨」*Dorn* との間にも、響きの類縁性を見てとっていたのかは定かではない。しかしながら「ノルン」のみならず、北欧神話のブリュンヒルトの「炎の生垣」や「眠りの茨」との関連性、および、その生垣を通りぬける際の「苦難」を強調したいグリム兄弟にとって、「茨」*Dorn* という響きは、非常に重要であったと推察される。「いばら姫」*Dornröschen* において、越えがたき境を表し、己の形姿の変化でもって、その時間感覚の相違を示し、さらに内部が、「死」と「再生」の空間でもありえる植生とはやはり、時の流れを初めから包み込んでいる奥深い「森」*Wald* ではなく、その生長のプロセスが時の流れが具現化しうる、伸びゆく「茨の生垣」*Dornenhecke* において他にない。

付記：本稿は、2006 年日本独文学会秋季研究発表会シンポジウム「グリム・メルヒェン研究—その多様なアプローチ」（2006 年 10 月 14 日、於九州産業大学）におけるモティーフ研究の立場からの研究発表「〈魔法の眠り〉と〈時間の喪失〉—グリム・メルヒェン〈いばら姫〉についての一考察—」の原稿に、加筆訂正を施したものである。また本研究は、日本学術振興会平成 18 年度科学研究費の交付による研究成果の一部である。

<sup>37</sup> DM. Bd. 2., S. 1007f.

<sup>38</sup> ebd., S. 1008.

<sup>39</sup> „[...] so ging der Zauberspruch in Erfüllung, und sie stach sich damit.“（第五版）が、„[...] so ging der Zauberspruch in Erfüllung, und sie stach sich damit in den Finger.“（第六版）へと変えられ、「指」という語が加筆されている。Vgl. Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Bd.1.6. Aufl.Göttingen 1850; S. 295.